Stay a Moment

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔａｙ ａ Ｍｏｍｅｎｔ

【Ｎコード】
Ｎ４７１７Ｃ

【作者名】
浅葉りな

【あらすじ】
丘の上には、幽霊が住むといわれる大きな屋敷があった。他校の生徒とケンカして、傷を負いながら京介はそこへと逃げ込んだ。そこで、京介を出迎えたのは、帰らぬ人をいつまでもいつまでも待ち続ける、年老いたひとりの女だった。

丘の上の屋敷は幽霊屋敷と呼ばれている。だから誰も近寄らない。俺がそれを思い出したのは、本当にただの偶然だった。

俺はそのとき、逃げていた。

俺はいわゆる不良というやつで、しょっちゅう他校の不良とケンカばかりしていた。俺が望んだわけじゃないが、深見京介といえば、近隣じゃちょっと名が知れていたから、黙っていても相手が向かってきた。

その日はちょっとしくじって、多勢に無勢、俺はボコボコにされかけて逃げ出したのだった。

どこに逃げても結局は地元、見つかるのは時間の問題だった。

なら、どこに身を隠す――？

そんなときに思い出したのが、丘の上の屋敷だった。

幽霊屋敷というくらいだ、きっと空家に違いない。それにあれだけ大きければ、いくらでも隠れる場所はあるだろう。

そうして入り込んだ庭で、俺は千鶴子に出会った。

ずっとひとりで、帰ってこない夫を待っているのだという老婦人に。

その日はちょうど雨が降っていて、なんとなく、ドラマみたいだ、と思ったのをよく覚えている。

窓の外では、相変わらずの雨が降っている。その上、六月のじっとりとした空気が肌を包んでいて、不愉快極まりない。

「どうしたの？　おいしくなかった？」

心配そうに千鶴子に言われ、俺はぶんぶん首を振って、しなしなしたリンゴにフォークを立てた。

「まずいわけないだろ。いつも楽しみにしてるんだぜ」

「まぁ。お菓子が食べたくて来てるなんて、子供みたい」

「それだけじゃないって」
とは言うものの、ここで出される洋菓子が魅力的なのは事実だ。
こんなものを作ってもらったことはなかったから。
「子供でもかまわないでしょう？　喜んで食べてくれる子供がいることくらい、つくり甲斐のあることってないのよ」「ふぅん……」
リンゴを口に運ぶ。甘酸っぱい。
子供扱いされるのは、正直なところ、あまり嬉しくはない。
でも、それもそんなに悪くはないのかな、とも思う。
とにもかくにも俺は、他校の不良どもと小競りあいを繰り広げるより、ずっと、こんなたわいのない時間を気に入っていた。

俺は音を立てないように、裏口から身をすべりこませた。
義母は俺の顔を見れば厭味を言わずにはいられないらしく、こうして俺は極力顔をあわせないようにしていた。
古い板張りの廊下を、つま先だけで歩いていく。階段を上がって、つきあたりにある部屋へはいる。
やっと、俺は息を吐いた。ドアに内側からかぎをかけ、学校指定のかばんをベッドへ放る。
ガタのきた椅子に座って、足を投げ出した。
俺はいわゆる、妾腹、というやつなのだ。だから家では居心地が悪い。一番マシなのが自分の部屋で、それですら、こうしてかぎをかけなければ落ち着けない。
俺の母親は、義母の妹だ。俺がうまれてすぐに母親は死んで、仕方なく、俺は引き取られた。
その頃にはもう、俺と半年しか年の違わない弟がうまれていた。
おもしろくなかったんだろう。義母は弟を猫かわいがりした。逆に俺は、厭味を言われたりする以外には、ほとんど放っておかれた。
実際、この部屋にある家具のほとんどは、弟のお上がりだ。俺は

十五年間、弟のおこぼれにあずかって生きてきた、というわけだ。
別に不満があるわけじゃない。
ただ、こうして家に戻るたび、はやくここから出ていきたい、と思う。はやく大人になりたい、と思う。
弟は無邪気に俺を慕っている。それは悪い気はしない、けれど。
俺は机の引き出しからマルボロの箱をひっぱりだす。箱には一本、赤い線がはいっている。
くわえて、オイルライターで火をつける。軽く、独特のオイルのにおいが鼻につく。
煙を深く吸い込んで、吐き出す。いったん、肺の奥ふかくまでしみた煙は、吐き出したときにはひどく白くなっている。
肺を黒ずませるから、その代わりに白いのかもしれない、とふと思う。
タバコはいい。煙は脳をにぶくする。その方が余計なことを考えずにすむ。だから、いい。
そうでもないと、息がつまってしまいそうな気がする。
そんなこと、あるはずがないのに。
ここは少なくとも、俺さえいなければ、絵に描いたようなすばらしい家庭、なのだ。
俺ひとりが異分子だ。
親父だって、悪い男だっていうわけじゃない。俺の母親以外の女と浮気したなんて話はついぞ聞いたことがない。ややワーカホリックのけがあるものの、義母や弟にはひどく優しい。多分、魔が差した、というやつなのだろう。俺の母親との一件は。
つまり、俺という邪魔者さえいなければ、どこにでもある幸せな一家なのだ。
自分が望むときに、大人になれるのだったらいいのに。
そんなことを考えながら吸いこんだ煙はにがくて、俺は涙目になりながらむせてしまった。

広い庭に咲き乱れる花々に手分けして水をやっていたら、にわかに空が曇った。
ぽつり、と一滴頬にきたかと思うと、雨はすぐに本降りになった。
あわててじょうろを放り出し、走る。それでも雨は下着にまでしみた。
服は重いし身体はつめたい。館の中に逃げこむと、俺はひとつ、くしゃみをした。
千鶴子は大丈夫だっただろうかと目をやると、彼女はタオルを胸にかかえて、稲光を見つめていた。
今、千鶴子の両目から涙があふれたとしても、自然なことだと思ったに違いない。それくらい、千鶴子はあやうい表情をしていた。
話しかけていいものか、とふと思う。
話しかけたら、千鶴子は泣き出してしまうんじゃないだろうか。
勝手にバスタオルを探してきて、それで水滴を拭いてシャツをしぼった。俺がそうやって身支度をととのえ終えても、まだ千鶴子はそのままでいた。
俺はもう一枚タオルを持ってきて、千鶴子に差し出す。
そうするとやっと千鶴子は気がついたようで、俺を見つめながら目をしばたたかせた。
「どうしたんだよ」
訊ねると、千鶴子は微笑んで、視線をさまよわせた。
一度口をひきむすび、ゆっくりと開く。
「あの人が行ってしまった日も、こんなふうに雨が降っていたの」
あの人、という言葉に、胸がちりちりした。
もう気が遠くなりそうなくらい、長い時間がたっている。帰ってくるわけはない。
それなのに、もしかしたら、と待ちつづけて、どれだけの時をむだにしたのだろう。
かつては華やかだったこの屋敷も、今ではとうに忘れ去られて、幽霊屋敷と呼ばれるまでになったというのに。

すべては過去のことのはずなのだ。もう遠い日のできごとのはずなのだ。
それなのに千鶴子はまだ、過去の亡霊にとらわれている――
なにか言おうとして、俺は口を開きかける。でも、言葉は出てこない。
なにを言えばいいというのか。
俺は多分、千鶴子をなぐさめる言葉なんて持っていやしないのだ。
千鶴子はまた、窓の外に視線をうつした。
俺はなにも言えず、かといって立ち去ることもできず、暗くなるまで千鶴子を見ていた。

すっかり、遅くなった。
よもや心配などしてはいないだろうが、見つかると少々面倒だ。そう思いつついつものように裏口から入ると、その瞬間、腕をつかまれた。
「なにすんだよ」
手を振り払う。
なぜか俺を待っていたのは、親父だった。
なにを怒っているのかはよくわからないが、説教する気まんまんだというのは、ひと目でわかった。
「塾に行っていないそうだな。毎日、どこに行っているんだ？」
俺は黙って、下から親父をにらみつける。
今さら、なにを言っているのだろう。俺はもうずっと、塾になんか通っていなかった。
今さら、そんなことを咎めたいわけでもないだろう。俺は親父の言葉を待った。
「坂上の屋敷にかよっているそうだな」
「……悪いかよ」

「なにを考えているんだ」
「いいだろ、そんなの。どうだって」
小さくつぶやく。
「なんなんだ、その態度は」
俺は無視して、親父の脇をすりぬけた。階上の自室へ向かう。
「話を聞きなさい」
「やだよ。自主謹慎してやるから、ほっといてくれ」
半端にかまわれるのは腹が立つ。
どうしてこういうときばかり、親父は俺にかかわってこようとするのだろう。いっそ、全面的に放っておいてくれればいいのだ。
今さら俺に手をのばしてきて、いったいどうしようというのだろう。
俺はとうに、手を差し出すすべなど忘れてしまっている。なにもかも、もう遅すぎる。

自分で宣言した通り、俺は一歩も外へ出なかった。学校もサボった。
食事はたまに、弟がベランダ越しにさしいれてくれたものですませた。
ドアにはかぎをかけ、さらに前に椅子を置いて開けないようにし、篭城すること十日間。
そろそろいいだろうってことで、昼間、窓から抜けだした。
人通りの少ないところを通って、丘の上へ急ぐ。
しばらく行ってなかったから――もしかしたら、千鶴子は、心配していたりするかもしれない。
やがて見えてきた屋敷は、いつもと同じにひっそりとしていた。
門は閉ざされていて、中からかんぬきがかかっている。
――おかしい。

千鶴子はいつも、門をあけはなっていた。だから俺は、庭に入りこめたのだ。今までに一度も、かんぬきまでかかっていたということはなかった。
格子に手をかける。揺すってみるが、いやな音をたててきしむだけで、当然、ひらかない。
「……誰？」
庭の方から誰かが走ってきた。黒いスーツを着た若い女だ。
「おまえこそ誰だよ。千鶴子はどうしたんだ？」
「千鶴子なら、私の伯母よ。なんの用？」
「会いに来たんだよ」
「いないわよ。死んじゃったもの」
あっさりと言われた言葉が、一瞬、わからなかった。
「嘘だ」
そんなことが、本当であるはずがない。
だって最後に会ったときは、少しもおかしなところはなかった。
それなのに、死んでしまうなんて、そんなことがあっていいわけはないのだ。
「本当よ。もうお通夜もお葬式もすませたの。今は遺品の整理をしてたところだもの」
「嘘だ」
「そんなことして、なんになるのよ？」
女はため息をついた。
「そんなに言うなら連れてってあげるわよ。お墓」
返事も聞かず、女は歩き出した。俺はそのあとに続く。
女は黙って歩いていた。だから俺もくちびるを噛んで、無言で歩いた。
屋敷の外側をぐるりとまわり、丘の向こうへ出る。ふもとのあたりに、白い柵で囲まれた土地があり、洋風の墓石がいくつも並んでいるのが見えた。
けれど、寺も教会もない。墓守の掘建て小屋もない。

もしかしたら、あの屋敷と千鶴子が、この墓所をまもっていたのではないか――ふと、そんなことを思う。
鉄扉をくぐり、俺は奥へ奥へと導かれて進む。丘のふもとへと向かって、墓地は増設され続けたらしい。
女が立ち止まったのは、真新しい、小さな白い墓石の前だ。西洋ふうに、ローマ字で墓碑銘が刻まれている。
Ｃｈｉｚｕｋｏ　Ａｓａｋｕｒａ――
本物、だ。
掘り起こした土のあともまだ新しい。手を伸ばして触れた墓石も、本物の石だ。ざらついた感触を、指先に感じる。
俺ひとりを騙すためだけに、こんな大掛かりなことをするわけがない。
「わかったでしょ？　もう、あの人は死んだの」
投げつけられる言葉にも答えられない。
身体が砂のかたまりになって、指先から崩れていくような気分だった。
「あなた、伯母さんのなんなの？　遺産ならないわよ。もうあの屋敷と土地以外、あの人には残ってなかったんだから」
殴ってやろうか、と思う。
けれども、そんな価値すらない、とすぐに思い直す。なんてめでたい頭をしているのだろう。こいつは。
「帰れよ」
「なによ。連れてきてもらっておいて」
「いいから、帰れよ」
遺産だとかなんだとか、そんな言葉は少しも聞きたくない。
「おまえらみたいな下衆と一緒にするな」
「下衆って……なんなのよ、それ！　私はあの人の実の姪よ。権利があるの」
「おまえになんか俺の気持ちはわからねーよ」
「……いいわよ、勝手にしなさいよ。私、帰るから。遺品に手をつ

けたりしたら、訴えるからね」
「勝手にすりゃいいだろ」
俺はうなずいて、あごをしゃくった。女は俺を一瞬にらみつけると、去っていった。
まったく、なんてもののわからないやつなんだろう。死者を悼むのに、ものなんかいらないのだ。むしろ、邪魔なのだ。
俺はそっと、墓前に膝をついた。
石に刻まれた彼女の名を、指でなぞる。
ほとり、と涙が地面に落ちた。
この涙は土の下の、千鶴子まで届くだろうか――
俺は結局、なにひとつ、できなかった。もうなにもできない。してやれない。
どうして俺はもっと早く、この丘に足を向けようとしなかったんだろう。どうしてもっと早く、千鶴子に出会わなかったんだろう。
少しくらい早く会っていたからって、なにができたわけでもないことくらい、わかっている。
よく、わかっている。
でもそれでも俺は、もっと早くに出会いたかった。
少しだけでいい。
もう、ほんの少しだけでいい。
一緒にいたかった。話がしたかった。
土をつかむ。握りしめる。
涙があふれて止まらないのは、きっと、土と一緒に握りこんだ小石が皮膚に刺さるからだ。
きっと、そうだ。
そうに違いない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4717c/

Stay a Moment

2010年10月8日15時20分発行